

氏名	赤 木 笑 入
学位の種類	医 学 博 士
学位授与番号	乙 第 133 号
学位授与の日付	昭和40年 9 月30日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第5条第2項該当)
学位論文題目	慢性肝炎並びに肝硬変症における十二指腸粘膜生検組織の病理組織学的研究 第1編 慢性肝炎並びに肝硬変症を中心とした肝疾患の十二指腸粘膜の計測値について 第2編 慢性肝炎並びに肝硬変症を中心として肝疾患の十二指腸粘膜上皮細胞の増殖新生および構成細胞について
論文審査委員	教授 小坂 淳夫 教授 平 木 潔 教授 小川 勝士

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

肝疾患時にみられる腸管の病態を解明するため、慢性肝炎並びに肝硬変症について十二指腸第3部にて粘膜生検を行い、病理組織学的に検索すると共に連続切片により立体的に粘膜を計測し、更に粘膜上皮細胞の細胞分裂指数および構成細胞について推計学的にあわせて検討した。

十二指腸粘膜の絨毛の高さ、幅並びに腺層の厚さは慢性肝炎では正常例に比し有意差は認めないが、肝硬変症においては絨毛の高さ並びに腺層の厚さは減少し絨毛の幅の増加を認め、更に粘膜上皮表面積は慢性肝炎特に肝硬変症では減少の傾向著しく(15.3%)、粘膜吸収面面積の減少が消化吸収障害の一因となる事を明確にした。又慢性肝炎では病理組織学的に著変を認めないが肝硬変症では絨毛の萎縮、固有層の細網線維の増殖及び Lieberkühn 氏十二指腸腺の変性、消失を認めた。

粘膜上皮細胞の細胞分裂指数は絨毛の高さ、粘膜上皮表面積の減少と正の相関関係を示し粘膜の形態変化と関係ある事を明らかにし、肝疾患では杯細胞は一般に増加し、Paneth 氏細胞並びに銀好性細胞は減少の傾向がみられたが、粘膜上皮層に遊走するリンパ球数には正常群との間に有意差はなく、好酸球の遊走を認めた。

岡山医学会雑誌 77巻5, 6号に掲載予定

論文審査の結果の要旨

赤木笑入提出の「慢性肝炎ならびに肝硬変症における十二指腸粘膜生検組織の病理組織学的研究」に関する学位論文につき審査した結果の要旨は、次の通りである。

慢性肝炎ならびに肝硬変における十二指腸粘膜について検討した成績はほとんど見当たらない。然し乍らその組織像の変化は従来推定された肝障害の慢性化に関する再検討を行う場合に重要な所見と考えなければならない。著者は十二指腸粘膜の生検を行いうるようになった機会に、これら疾患例の十二指腸第3部超始部の生検を行い、えられた粘膜片について第一編では粘膜上皮の計測を行い、第二編では粘膜上皮細胞の増殖、新生につき、また構成細胞につき検討を加え、新知見をえている。即ち絨毛の高さおよび線層の厚さは肝病変の慢性化につれて減少の傾向を示し、絨毛の幅は肝硬変において増加し、粘膜上皮表面積は慢性肝炎、肝硬変ともに減少、とくに肝硬変では粘膜上皮表面積の減少につれ、脾腫の増大と消化吸収障害の程度が増大した。即ち肝硬変症の消化吸収障害は従来の報告の如く胆汁分泌障害のみによるのではなく、この吸収面の縮少が関与していることが明らかにされた。また粘膜組織像ではとくに肝硬変においてそれぞれ組織の萎縮過程が目立った。粘膜上皮細胞の分裂指数は肝硬変において著明に減少、絨毛の高さ、粘膜上皮表面積と正の相関性を示した。杯細胞は肝硬変において著しく増加、Paneth細胞数、銀好性細胞数は減少の傾向を示した。粘膜上皮層に遊走するリンパ球では著しい変化がみられなかった。これらの変化は消化、吸収面との関係で注目される所見である。

以上の通り本論文は新しい知見に富み、学術上有益であり、著者は医学博士の学位を授与せられるべき学力を有すると認める。